

現代アメリカ詩の一面

—— 自然破壊、商業化、

都市問題のテーマをめぐる ——

矢 口 以 文

特に米国の生活にテクノロジーの波が明らかな形で押し寄せ始めたのは19世紀後半であると言えよう。この頃に、自動車、映画、タイプライター、電話といった文明の利器が初めて作られ、又、米国大陸を狭くした鉄道が敷設された。

工場がつぎつぎに建てられ、人口が都市に集中し、貧富の差が大きくなり、労資の対立が生まれてくる。以前になかったような多くの問題が生じてくる。20世紀の生活はその延長であり、特に第二次世界大戦以後はテクノロジーが著しく進み、生活に多くの便利さをもたらした反面深刻な歪みをも生み出すことになった。

このエッセイでは、テクノロジーの進歩とのかかわりの中から生じてくる自然破壊、商業化、それに都市の中のいろいろな問題を詩人たちがいかに取りあげ、いかにそれに処していこうとしているのかを、作品を通して見てゆきたい。

自然破壊の問題について

広大な大陸であるアメリカでは、自然破壊はかつてはそれほど問題にはされなかった。勿論、インディアンたちにとっては、白人の自然破壊はインディアンの大量虐殺につながったために、初めの頃はかなりの抵抗を続けていたが、無益であった。白人にとって自然破壊は開拓と同義語であり、宗教的にも奨励されるべきものであった。初期のピュリタンにとっ

て、周囲の荒々しい自然は克服すべき悪魔の住み家を意味していた。開拓の精神こそアメリカ人の本来の精神なのだ。

楽天的な国民詩人ホイットマンは当然のこのことのように汽車を讚美しているが、機械化になによりも反対であったソローでさえ、大平原をつつ走る汽車の姿を、漠然とした不安を恐らくは感じながらも、むしろ牧歌的に描いている。

And hark! here comes the cattle-train bearing the cattle
of a thousand hills, sheeppcots, stables, and cow-yards
in the air, drovers with their sticks, and shepherd boys
in the midst of their flocks, all but the mountain pas-
tures, whirled along like leaves blown from the moun-
tains by the September gales. The air is filled with the
bleating of calves and sheep, and the hustling of oxen,
as if a pastoral valley were going by.⁽¹⁾

そして、聞け！こんどは一千の丘の家畜を運ぶ家畜列車がくる。羊小舎、厩、戸外の牛飼場、棒をもった家畜追い、自分の羊の群のまんなかに立った羊飼いの少年——山の牧草地だけはのぞいてそのほかのすべてが九月の嵐によって山から吹きとばされる木の葉のように運ばれていく。空気は小牛や羊の鳴き声、牡牛どものひしめきにみたされて、さながら谷間の牧場が進んでいくかのようなのである。⁽²⁾

しかし自然破壊が猛威をふるう現在では、多くの詩人たちはある時は激しくそれを告発し、又ある時は、それに批判的ではあっても荷担せざるを得ない自分の立場の矛盾を、痛みをもって描いている。かつての鉄道にかわるのが高速道路だが、それは自然破壊のチャンピオンのひとつなのだ。エコロジイの詩人とも云われるゲーリイ・スナイダーが道路と自動車の自然破壊を次のように描く。

How did a great Red-tailed Hawk
come to lie — all stiff and dry —

on the shoulder of
Interstate 5 ? ("The Dead By The Side Of
The Road")⁽³⁾

どうして大きな赤い尾の鷹が
すっきりかたく乾いて 落ちているのか
ハイウェイ 5 号線の
路肩の上に

第二スタンザからは自動車に轢かれたスカンクや仔鹿、リングテイル、射たれた雌鹿などの動物がでてくる。山の中に高速道路を作って自然破壊をすることへの批判と、破壊された動物たちへの隣れみがある。

ウィリアム・スタフォードもこのテーマでよく詩を書いている。

<Downstream they have killed the river and built a dam; / by that power they wire to here a light: >⁽⁴⁾ (流れにそって彼らは川を殺してダムを作った。/その力で彼らはここまで電線を使って光りを送る) とも書いているが、このテーマを扱った彼のすぐれた作品は明らかに "Travelling through the Dark" だろう。

スナイダーの詩と同様に、山の中に作られた自動車道路が舞台なのだ。ある夜、彼が自動車をとぼして家に帰ろうとしていた時、道路に死んだばかりの雌鹿を見つけた。彼女はみごもっていた。第三聯は次のようだ。

My fingers touching her side brought me the reason-
her side was warm; her fawn lay there waiting,
alive, still, never to be born.
Beside that mountain road I hesitated.⁽⁵⁾

脇腹に指をふれて初めてわかった—
脇腹は暖かかった。仔鹿がそこに 待っていたのだ、
生きて、じっと、決して生まれないのを。
その山道のそばで私はためらった。

ためらったが、遂には彼はその母鹿を谷の下に突き落してしまう。そうしなければ、自動車事故がおきて、もっと死人が出るかもしれないことを彼は暗示する。彼の態度は象徴的である。自然破壊に心を痛め

ながら、人類が生き続けるためにそれについて荷担せざるを得ない現代人の立場が描かれているのだ。

自動車は動物たちを轢き殺す一方、その排気ガスも自然の生態を破壊する。実際、現代の大きな脅威は水、土、空気の汚染である。それは結果的には人間破壊につながってくる。スナイダーは二つの種類の汚染に注意をしている。

Pollution is of two types. One sort results from an excess of some fairly ordinary substance—smoke, or solid waste—which cannot be absorbed or transmitted rapidly enough to offset its introduction into the environment, thus causing changes the great cycle is not prepared for. (All organisms have wastes and by-products, and these are indeed part of the total biosphere: energy is passed along the line and refracted in various ways, “the rainbow body.” This is cycling, not pollution.) The other sort is powerful modern chemicals and poisons, products of recent technology, which the biosphere is totally unprepared for. Such is DDT and similar chlorinated hydrocarbons—nuclear testing fall-out and nuclear waste—poison gas, germ and virus storage and leakage by the military; and chemicals which are put into food, whose long-range effects on human beings have not been properly tested.⁽⁶⁾

汚染は二種類。ひとつは煙とか荒ごみなど、ありふれた物質の過剰。これは環境への吸収同化に手間どるため、大循環系に多少の変化をもたらす。(すべての有機体は、廃棄物を出す。しかしこれらは生物圏の一部だ。エネルギーはこの流れを通り、さまざまに屈折する……レインボー・ボディ。これは循環であって汚染ではない。)もうひとつは、現代のテクノロジーが産んだ強力な化学物質と毒物——生物圏にはそれらを受入れる用意がまったくない。たとえば D. D. T. と類似の塩素化合物。

現代アメリカ詩の一面

核実験の灰や原子力産業の廃棄物。軍による毒ガス、細菌、ビールスの貯蔵と漏出。さらに食品に添加されている化学製品が人体におよぼす長期的な影響は、まだ十分に検討されていない。(7)

彼は技術産業を癌⁽⁶⁾とまで言いきるのだが、最も悲劇的な汚染による自然と人間破壊は水俣のそれであろう。かつて米国において、自然破壊がインディアンの虐殺につながったように、現在でも汚染は人間の虐殺につながっている。ただし今日のそれは大企業による虐殺である。

水俣は米国の多くの詩人や作家、芸術家の注目するところとなり、写真家のユージン・スミスなどは水俣に住んで、その悲惨な現場を撮映して、世界の耳目に訴えた。そして水俣病はひとり水俣に住む人々の病いだけではなく、水銀に犯された人々の病名になったのである。水俣病について Joseph Mclead が次のような詩を書いている。

In Minamata the nervous system degenerates and becomes like stone.	水俣で 神経組織が 変質し 石のようになる。
First a tingling then a growing numbness about your lips	初めは うずき それから 唇のまわりがだんだん しびれてくる。
You cannot speak clearly and your hips seem to press your steps left, awry.	あなたは はっきり話せなくなる そして あなたのお尻が 足どりを左側に おしつけて ねじらせるようにする、

and the people
of the village
smile, knowingly.

すると村の
人々が
物知りげに微笑む。

When
Doctor Hosokawa
fed
the effluent
to cat No. 400
it
convulsed,
salivated,
and then suddenly
whirled
at terrific speed
and smashed itself,
a mass of fur and blood,
against
the laboratory wall.

細川博士が
廃液を
猫の400号に
飲ませた
時,
それは
けいれんし,
よだれをたらし,
それから突然
恐しいスピードで
ぐるぐるまわり,
自分の毛と血の塊りを
実験室の壁に
むかって
ぶちつけて砕いた。

Doctor Hosokawa
was told
there would
be no more
experiments
with
Minamata cats.

細川博士は
水俣猫
での
実験は
もう
止めると
言われた。

Later,
when he sent
the bodies of the cats
to Tokyo University,

あとで
彼が猫の死体を
東京大学に
送ったら,

現代アメリカ詩の一面

they	死体は
disappeared	消え失せ、
and	そして
Doctor Hosokawa,	窒素工場から
now semi-retired	半分退職していた
from the Chisso Plant,	細川博士は
retired	写真と
to his photographs	ろうそくと
and candles	線香に
and incense	ひきこもり
and	死ぬ
he prayed	前まで
before	祈っていた。
he died. ⁽⁹⁾	

水俣病はアメリカにもある。カナダのインディアン部落に発生した水俣病をテーマにこの詩人は次のように描く。

Do	カナダを
you want	見たい
to see Canada?	か。
Come	北へ
to the north.	やってこい。
Come	ケノラへ
to Kenora	やってこい。
Bring	ネルソン・エディ
Nelson Eddy	と
and	ジャネット・マクドナルドを
Jeanette MacDonald.	連れてこい。

You want to see the Native People?	土着の人たちを 見たい か。
Come to Grassy Narrows.	グラスイ・ナローズに やってこい。
Here you will find hands with nothing to do, minds with nothing to think, bodies with mercury-cut nerve-ends, and a village gone crazy. ⁽¹⁰⁾	なんにもできない 手と、 なんにも考えられない 頭と、 水銀で破壊された神経のくずが ついている体と それに ひとつの 狂った 村が みつかるだろう。

すさまじい光景だ。白人の大企業がその利潤をあげるために、カナダの奥地の自然を水銀のたれ流しで破壊し、そこに住むインディアンの人々を水俣病で破滅させる。その現実が生々しく描き出されている。優雅な文体は使われるはずがない。

環境破壊が組織的に、意図的に行われるのは現代の科学兵器による戦争である。ベトナムでの米国の枯葉作戦はその象徴的な好例であろう。毒ガスや火器によって、ジャングルがぼろぼろにされる。スナイダーはそれを林業の言葉を使って“Clear-cut”（皆伐）と言う。

Forestry. “How Many people Were harvested in Viet-nam?”	林業。「どの くらいの人々が ベトナムで 伐り倒された？」
--	--

現代アメリカ詩の一面

Clear-cut, “Some	偕伐だ。「あるものは
Were children,	子供たちで、
Some were over-ripe.” ⁽¹¹⁾	又あるものは熟れすぎだった。”

自然も人間も無差別に破壊されたことがはっきり表現されている。大企業や権力者の手に握られたテクノロジーはこのように危険きわまりないものとして描かれているのだが、現代のその最大のもは原子力だろう。原子爆弾の恐しさは広島と長崎においてすでに証明済みだが、今や水爆は各地において実験されている。米国に関して言えばビキニ環礁やネバダの砂漠などにおいてなされている。スタフォードの“*At the Bomb Testing Site*”という詩は、その砂漠にいとかけに焦点をあてることで、このような実験が人類の未来に破滅的な結果をもたらすだろうと暗示する。

ジェンドルツァイチュク (Jendrzejczyk) の詩“*Witness*”はネバダでの原爆実験を目撃した Paul Cooper のことを描いている。

I

I press my face against the earth,
exploding into particles of dust
that shine then fade like planets.

I am strapped to a star,
my legs spread between its points
suspended at ground zero.

Here at the furnace door
the smell of flesh and bones is faint,
the sound of sizzling breath is
my own.

II

We marched for days and never

looked back —
the line of the desert never changes
or curves to touch the sea.

I stand at the edge
a thousand miles later,
and feel the sand pulsing like a
million tiny suns,
or a dying desert rose in
my blood.

Ⅲ

I press my face against the earth.
and slowly turn away.⁽¹²⁾

I

顔を大地につけると
大地は爆発して塵のみじんになって
輝き、それから遊星のように色あせる。

私は星にしばりつけられている、
その端と端との間に脚がひろげられ
原爆爆発の真下につるさされている。

溶鉱炉の戸のここでは
骨と肉の匂いはかすかだ、
しゅうしゅういう息の音は
私のだ。

Ⅱ

私たちは何日間も歩いて決して
振りむかなかった——

砂漠の線が変わったり
曲って海にふれることは決してない。

千マイルあとの
そのふちに立って 私は
砂が百万の
小さい太陽のように鼓動するのを、
又は 死んでゆく砂漠が
血の中で立ちあがったのを感じる。

Ⅲ

顔を大地につけて
ゆっくり そむける。

原爆よりはるかに強力な水爆の製造競争がいくつかの国々の間で狂気
のようになされているが、その一方では原子力の平和利用が叫ばれてい
る。特に発電会社が強力に推進役を果しているのだが、スナイダーは〈No
more kidding the public about nuclear waste disposal: it's im-
possible to do it safely, and nuclear-generated electricity can-
not be seriously planned for as it stands now.〉⁽¹³⁾ (核廃棄物に
ついて大衆をごまかすのはもうやめよ。その安全な処理は不可能なのだ
から、原子力発電は今のところ計画すべきではない。)⁽¹⁴⁾と警告し、モラ
トリウムを要求する。

しかし原子力発電所は各地に建設され、将来の不吉な結末を予想させ
るようなスリー・マイル・アイランドの事件が起った。このような状態
をスタフォードは次のように描写する。“雲”はおそらく原子力のこと
であり、“箱”は放射能測定器のことだろう。

Incident

They had this cloud they kept like a zeppelin
tethered to a smokestack, and you couldn't see it
but it sent out these strange little rays

and after awhile you felt funny. They had this man with a box. He pointed it at the zeppelin and it said, "Jesus!" The man hurried farther away and called out, "Hear ye, hear ye!" Then they coaxed the zeppelin down into the smokestack and they said, "We won't do that any more." For a long time the box kept shaking its head, but it finally said, "Ok, forget it." But, quietly, to us, it whispered, "Let's get out of here."⁽¹⁵⁾

事 件

ツェッペリン式飛行船のように保存してきたこの雲を彼らは煙突に結ばせたが、あなたには見えなかった、しかしそれはこんな奇妙な小さい光線を放ったので間もなくあなたは気分がおかしくなった。彼らにこの箱をもった男がいた。ツェッペリンの方にむけたら、箱は「まあ！」と言った。男は急いで遠ざかって、「聞いてくれ、聞いてくれ！」と叫んだ。そしたら彼らはツェッペリンをなだめて煙突にいられて、「もうこんなことは止めます」と言った。長い間、箱は頭を振り続けていたが「そうだ、忘れてしまえ」と逐に言った。しかし、静かに「ここから出てゆこう」と私たちに囁いた。

商業化の問題について

自然破壊の原因のひとつは大企業のエゴイズムだろう。彼らの目的は利潤であり、そのためにはどんなことでもしでかす。水俣の場合もそうだし、戦争を始めるのにも、死の商人である大企業の影響が大きいのである。

利潤こそが彼らの至上命令であり、神なのである。他人を自分の利益のために使い、必要がなくなると捨てるといった風潮が生まれてくる。勿論、神か金かという問題は聖書の中でも重要な問題になっているが、今日ほど大きな、あからさまな問題になった時代はかつてなかったと言えるだろう。産業革命以前には、教会がまがりなりにも指導的な役割を果たしていたのだから。

大企業は生産したものをどうにかしてさばかなければいけない。スーパーマーケットを作り、広告宣伝を使って、たくみに人々の心理をつかんで、不必要なものさえどんどん買わせる。新しい、便利なものが大量に、簡単に機械で生産され、売られ、消費され、乱売され、捨てられる。

エズラ・パウンドがかなり以前から、この傾向を嘆き、きびしい警告を発しているのは良く知られていることだ。彼は今の時代を Usura (高利貸) の時代だと言う。銀行も、大企業も usura なのだ。現代人の精神生活を汚染する公害なのである。このような世界にはかつてのギリシヤ・ローマの時代に生まれた古典は生まれることはないと嘆く。

weaver is kept from his loom

WITH USURA

wool comes not to market

sheep bringeth no gain with usura

Usura is a murrain, usura

blunteth the needle in the maid's hand

and stoppeth the spinner's cunning. Pietro Lombardo

came not by usura

Duccio came not by usura

nor Pier della Francesca; Zuan Bellin' not by usura

nor was 'La Calunnia' painted.

Came not by usura Angelico; came not Ambrogio Praedis,

Came no church of cut stone signed: Adamo me fecit.

Not by usura St Trophime

Not by usura Saint Hilaire,

Usura rusteth the chisel

It rusteth the craft and the craftsman
It gnaweth the thread in the loom
None learneth to weave gold in her pattern;
Azure hath a canker dy usura; cramoisi is unbroidered
Emerald findeth no Memling⁽¹⁶⁾

機織女は機織から遠ざけられる
利子では
糸は市場に回ることなく
羊も高利で益をもたらすことはない
利子は疫病のひとつ、利子は
乙女の手にもつ針を鈍くし
機織のわざをとどめる。ピエトロ・ロムバルドは
利子では世に現われず
ドウッチオも利子では世に現われず
またピエル・デラ・フランチェスカもベリーンも利子では現われない
「ラ・カルンニア」も描かれなかった
利子ではアンジェリコもアンプロギオ・ブレディスも現われず
「アダモ・メ・ヘシト」としてされた石で教会も建てられなかった
利子では聖トロフィム教会も建たず
利子では聖ヒレール教会も建たなかった
利子は鑿を錆びつかせ
利子は匠とそのわざを錆びつかせる
利子は機織の糸を噛み切り
だれも金の糸を模様に織ることは学ばない
藍は利子で腐食し、緋色の生地は縫い取りをほどこされず
メムリングはエメラルドを見つけることができない⁽¹⁷⁾

そして現代の求めるものはアテネの優雅ではなくて、粗製乱造の作品だ。

The "age demanded" chiefly a mould in plaster,

現代アメリカ詩の一面

Made with no loss of time,
A prose kinema, not, not assuredly, alabaster
Or the “sculpture” of rhyme.⁽¹⁸⁾

もっぱら「時代がもとめた」
のは粗製乱造の石膏細工とか
散文の映画で、決して雪花石膏^{アラバスター}とか
詩の「彫刻」ではなかった⁽¹⁹⁾

商業化に汚染されて、俗物化してしまったのは芸術の世界だけではない。キリスト教会も同じことだ。ローレンス・ファリングゲッテはこのように商業化した教会の墮落を、クリスマスの詩でカリカチュア化している。クリスマスは大商店が、ツリーとかケーキとかを売るための絶好の機会になっていることを描き、そんな所にキリストはいないと皮肉る。

Christ climbed down
from His bare Tree
this year
and ran away to where
there were no rootless Christmas trees
hung with candycanes and breakable stars

Christ climbed down
from His bare Tree
this year
and ran away to where
there were no gilded Christmas trees
and no tinsel Christmas trees
and no tinfoil Christmas trees
and no pink plastic Christmas trees
and no gold Christmas trees
and no powderblue Christmas trees

hung with electric candles
and encircled by tin electric trains
and clever cornball relatives⁽²⁰⁾

今年

キリストが裸の木から
おりて
キャンディのステッキやこわれ易い星のついた
根のないクリスマス・ツリーのない
所へ急いで行ってしまった

今年

キリストが裸の木から
おりて、
電気のキャンドルがたれさがり
電気の汽車と

金ぴかのクリスマス・ツリーのない
ピカピカ光るクリスマス・ツリーのない
すず箔でおおわれたクリスマス・ツリーのない
ピンクのプラスチック製のクリスマス・ツリーのない
金色のクリスマス・ツリーのない
花紺青色のクリスマス・ツリーのない
所へ急いで行ってしまった

ロバート・ブライの言葉を借りれば、＜Merchants have multiplied more than the stars of heaven＞⁽²¹⁾（商人の数は天の星より増えた）ということになる。

自分たちの生活がいかに機械化や商業化に影響されているかを「私の食物はみんな」という詩で、＜All my food / Is waiting for me / In cellophane bags / In a thousand markets / All over the world＞⁽²²⁾（私の食物はみんな/セロファン製の袋の中で/私を待っている/世界中の/

一千のマーケットで)と書き、最後に<The taste/Is explained on the outside.> (味は/外側に説明されている)と皮肉くる詩人もいる。

宣伝にのって美食をさせられるアメリカ人の病気はいわゆる文明病だが、その象徴的なものは虫歯だ。歯医者は繁盛して財をなす。このような「偉大な社会」では、<Dentists continue to water their lawns even in the rain>⁽²³⁾ (歯医者は雨の日でさえ芝生に水をまき続ける)とブライは言う。

そして金中心主義は最も親しい家族の人間関係をもむしばむ。次のB. A. Forrest の詩はその有様をグロテスクに描いている。死んだ人の目ぼしい財産は、関係者たちからはげたかのようにとられ、残ったものは価値のないものだ。本人の遺骨までもがその中に捨ておかれている。

Everything else went

House, furniture, china, stove
The mirror over the fireplace
Nothing remains but these
Few buttons and bank statements, etc.

Somewhere there is
Dust in an urn
Which the law says
May not be dispersed over the land⁽²⁴⁾

他のものはみんななくなった

家、家具、陶器、ストーブ、
だんろの上の鏡、
この少しばかりのボタンと銀行の報告書などを除いて
なんにも残らない

どこか

つぼの中に 遺骨がある、
法律によれば それは
土の上まいてはいけないのだ

すさまじいばかりの荒廃ぶりだ。商業主義が、金中心主義が価値判断の基準となってしまう結果生じた現実の断面図であろう。そして詩人たちのあるものも、大雑誌に詩を売ろうとするし、又自己を売りこむために宣伝広告を使うようになった。出版される詩集のほとんどには有名詩人の推薦文がのっているし、もらった賞の名や出版してくれた雑誌の名前がのっているのだ。

都市の問題について

産業化に伴って都市に人口が集中してくるが、農村にも都市化の波が押し寄せている。都市化とともにいろいろなひずみが生まれてくる。農村においてはコミュニティが存在していたが、それが次第に崩壊し始める。家庭の崩壊も珍らしくなくなる。犯罪が多く生まれるようになる。かつて都市は慈愛の母のような存在だったが、今はきけんで、貧しい、どす黒い存在で、犯罪の巣だ。

< They tell me you are wicked and I believe them, for I have seen your painted woman/under the gas lamps luring the farm boys. >⁽²⁵⁾ (お前は不埒だとみんなが言う、おれもそうだと思う、お前の白粉を塗りたくった女たちがガス灯の下で農村の若者をひっぱっているのをおれは見たからだ。⁽²⁶⁾) とかつてサンドバーグがシカゴの暗い面を描き、それをも含めて、< Come and show me another city with lifted head singing so proud to be alive and/coarse and strong and cunning. > (ほかにこのように昂然と頭をあげ、活々として粗っぽく強靱で狡猾なことを誇り顔に歌っている都市があったら、さあ見せてくれ) と讚美した。しかし今の詩人にはそのような楽観主義はもうない。

彼らは悲観的だ。エリオットがロンドンを Unreal city (幻の都市) と憂うつな調子で描き、その精神の荒廃を嘆いたが、その伝統を受けつ

現代アメリカ詩の一面

いであると言えるだろう。ゲーリイ・スナイダーは東京を< Peace, war, religion/Revolution, will not help. > (平和でも、戦争でも、宗教でも、/革命でも、どうにもならないだろう)と言う。

We live

On the meeting of sun and earth.
We live — we live — and all our lives
Have led to this, this city,
Which is soon the world, this
Hopelessness where love of man
Or hate of man could matter
None, love if you will or
Contemplate or write or teach
But know in your human marrow you
Who read, that all you tread
Is earthquake rot and matter mental
Trembling, freedom is a void,
Peace war religion revolution
Will not help.⁽²⁷⁾

俺たちは住んでいる

太陽と大地との出会う所に。
俺たちは住んでいる—俺たちは住んでいる—その俺たちの生活
がみな
これを、この都市を産み出した、それは
まもなく世界そのものだ、人間の
愛も憎しみも重要であり得ない
絶望状態、したいなら
愛するもいい、
黙想したり、書いたり、教えたりするのもいい、
だけど読むものたちよ、骨髄の中で知れ、
あなたたちの踏む所は地震のようにくさり、精神的に

揺れ動いていることを、自由はうつろで、平和ででも、戦争ででも、
宗教ででも、革命ででもどうにもならないことを
どうにもならないことを。

としめくくる。

産業化、商業化、都市化はみな相互に密接な関係を持っているのだが、
それらが進むにつれて、騒がしくなり、生活は便利になるがより忙しく
なる。車で象徴されるように人々は急ぐ。生活にゆとりがなくなる。コ
ミュニティが崩壊するから、故郷はなくなり、人々は孤独になり、不安
にさいなまれる。

ある詩人たちは現代社会の孤独をとりあげている。孤独は勿論、過去
の時代の詩人たちも好んでとりあげているが、現代は過去のどんな時代
よりも孤独が深い。隣り人からも、自己からも全く疎外された孤独であ
る。神を失ったものの孤独である。

マーク・ストランドの詩“The Tunnel”⁽²⁸⁾ (トンネル) はその典型で
ある。“私”の家の前に誰か見知らぬ人が立っている。それで“私”は
不安にかられ、落ち着かなくなる。

A man has been standing
in front of my house
for days. I peek at him
from the living room
window, and at night,
unable to sleep,
I shine flashlight
down on the lawn.
He is always there.

ひとりの男が 何日間も
私の家の前に
立っている。居間の
窓から のぞいて

現代アメリカ詩の一面

みた、夜には
眠れなくて
懐中電灯で 下の
芝生を照らしてみる。
彼はいつもそこにいる。

“私”は彼を去らせようとして、いろいろなしぐさをするが彼はどうしても去ろうとしない。遂に“私”は自分の家から脱出することを決心して、隣りの家の庭までトンネルを掘る。

When he seems unmoved
I decide to dig a tunnel
to a neighboring yard.
I seal the basement off
from the upstairs with
a brick wall. I dig hard
and in no time the tunnel
is done. Leaving my pick
and shovel below,

彼が動かないように見えた時
私は隣りの庭まで
トンネルを掘ることを決心する。
地下室を煉瓦の壁で
二階から
封鎖する。懸命に掘って
ほどなくトンネルが
できる。つるはしと
シャベルをおいて、

“私”が隣りの家に出た時に、誰も助けにきてくれない。それどころか隣りの家の誰かが“私”をじっと、不安な眼つきで見守っている。

I come out in front of a house
and stand there too tired to
move or even speak, hoping
someone will help me.
I feel I'm being watched
and sometimes I hear
a man's voice,
but nothing is done
and I have been waiting for days,

家の前に出て
そこに立っている、動くのも
話すのもできないほどに疲れきって、ただ誰かが
助けにきてくれるのをのぞみながら。
私は監視されている感じがする、
ときどき男の
声が聞えるが
何もおこらず
私は何日間も待ち続けている。

この最後のスタンザによると、私たちは遂に、初め“私”の庭に立っていた人が、助けを求めてトンネルを掘って逃げてきた別の隣りの人だったのに気がつく。しかし“私”は助けるどころか、不安を感じてトンネルを掘って逃げ出すのだ。“私”に助けを求められた隣りの人は、やがて不安に脅えて、その隣りの庭へトンネルを掘って逃げ出すのだ。ここではすべての人が孤独だ。

詩人の眼に映る都市の人間はこのように孤独で、よるべなく、淋しくて不安なのだ。信頼関係の絆は切れて、恐怖に心が満たされている。他人を助けようとする積極的な姿勢がない。自分のことにのみかかずらわっている。自閉症的人間なのである。

現代の都市で、人々は狂わないで生きてゆけるだろうか。今米国で、かつてないほど多くの人々が精神病院にかかっている。詩人も同じだ。

かつてないほど多くの詩人たちが精神病院に入院したり、自殺したりしている。ロバート・ローウェル、ジョン・ベリイマン、アン・セックストン、シルビア・プラス。ギンズバーグの「吠える」が捧げられたカール・ソロモン。そしてギンズバーグはその「吠える」の冒頭で＜I saw the best minds of my generation destroyed by madness,＞⁽²⁹⁾（私の世代の最良の精神が狂気によって破壊されるのを見た）と書き、現代の都市の地獄をリアルに展開してゆく。

アン・セックストンは何度か精神病院に入り、何度か自殺を試みた詩人だが、自分の異常な経験を告白する。“Music Swims Back to Me”⁽³⁰⁾（音楽が泳いで私の所へ戻ってくるの）は病院の中での経験を描いたものだ。

Wait Mister. Which way is home?
They turned the light out
and the dark is moving in the corner.
There are no sign posts in this room,
four ladies, over eighty,
in diapers every one of them.
La la la, Oh music swims back to me
and I can feel the tune they played
the night they left me
in this private institution on a hill.

ね 待って。家に行くのはどっちの道？
彼らはあかりを消した、
暗闇が隅のあたりで動いている。
この部屋には道標がない、
八十才をこした四人の婦人たちが
一人残らず おしめをしている。
ラララ、おお 音楽が泳いで私の所に戻ってくるの、
丘の上の この個人病院に
彼らが私をいれていった夜に

彼らが奏でていた調べを感じる事ができるわ。

私が狂って、病院にいれた時に、彼らは鼻で歌を歌っていたのだ。四人の老婦人も私も、物のようになつかわれている。狂っているのは私たちなのか、それとも彼らなのか。セックストンはパトリア・マークスとのインタビューで、*<I think we go along very complacently and brainwashed with all kinds of pabulum, advertisements, the sameness of supermarkets, everything — >*⁽³¹⁾ (私たちは自己満足してしまい、いろんな種類の食物とか広告とか、同じようなスーパー・マーケットに四六時中洗脳されている) と言っている。そのような現代の都市生活こそ精神病院ではないのか、と彼女は暗示する。正常な人間の住める所ではなくなったのである。

都市の未来は今世紀の前半にロビンスン・ジェファーズの予言したように破滅にむかっているのかもしれない。少くとも詩人たちの何人かはそう感じている。ジェファーズは大量の魚が巾着網でとらえられる様子を描きながら、そのように都市に住む人々に破滅がやってくると言う。詩“*The Purse-Seine*” (巾着網) からの一節である。

Lately I was looking from a night mountain-top
 On a wide city, the colored splendor, galaxies of light:
 how could I help but recall the seine-net
 Gathering the luminous fish? I cannot tell you how beautiful
 the city appeared, and a little terrible.
 I thought, We have geared the machines and locked all
 together into interdependence; we have built
 the great cities; now
 There is no escape. We have gathered vast populations
 incapable of free survival, insulated
 From the strong earth, each person in himself helpless,
 on all dependent. The circle is closed, and
 the net
 Is being hauled in. They hardly feel the cords drawing,

yet they shine already. The inevitable mass-
disasters
Will not come in our time nor in our children's, but we
and our children
Must watch the net draw narrower, government take all
powers — or revolution, and the new government
Take more than all, add to kept bodies kept souls — or
anarchy, the mass-disasters.⁽³²⁾

近頃私は 夜の
山の頂きから 広い市を、
色どられた輝きを、光りのきら星を見ていた。
輝やく魚を集める巾着網をどうして
思い出さずにはいられようか。その市がどんなに
美しく、そして幾分恐しく見えたかを表現できない。
私たちは機械を調整し、すべてを噛み合わせ
相互に依存させ、偉大な都市を
築きあげた、しかし今や
逃れるすべはない、と私は思った。強い大地から
絶縁されて、自由に生き残れない
広大な人口を集めたが、それぞれが自分では無力で、
みんなに頼っている。輪が閉じられ、網が
たぐられている。網が張っているのを殆ど感じないが、
彼らはもう輝いている。避けられない大惨事が
この時代や子供らの時代にはこないだろうが、
私たちも子供たちも
警戒しなければいけない、網が狭まり、政府が
あらゆる権力を握るのを — 又は革命が新政府が
あらゆる物以上を握り、促えた体に促えた塊を
つみ重ねるのを — 又は無政府状態か大惨事を。

以上、アメリカの詩人たちが自然破壊、商業化、都市化といった互にもつれ合っている現代文明社会の問題とどのように取り組んでいるかを、いくつかの作品を見ることで明らかにしようとしてきた。

最後に引用したロビンソン・ジェッファーズの詩に表現されている大惨事への予感彼の死後、他の詩人たちの作品の中にも強く感じられる。現代の詩人たちの傾向は過去のようにオプティミステックではない。彼らの多くは覚めた眼で社会をみつめている。

彼らは危険な状態を告発し、警告を発し、批判をし、必要に応じては実際行動に参加さえする。これは現代アメリカ詩における見逃すことのできない特徴のひとつである。

〔註〕

- (1) H. D. Thoreau, *Walden* (edited by Sherman Paul, Houghton Mifflin, 1957) p. 84
- (2) ソーロー「森の生活」(神吉三郎訳, 岩波文庫, 1977年) p. 168
- (3) Gary Snyder, *Turtle Island* (A New Direction Book, 1974) p. 7
- (4) 詩「The Fish Counter at Bonneville」からの引用。William Stafford, *Stories That Could Be True*, (Harper and Row, 1977) p. 43
- (5) *Ibid.*, p. 61
- (6) Gary Snyder, *op. cit.*, pp. 93-94
- (7) ゲーリー・スナイダー「亀の島」(サカキ ナナオ訳, 「亀の島」を発行する会, 1978年) p. 114
- (8) *Ibid.* p. 127
- (9) *Harrowsmith* (Camden House Publishing Limited, 1978年) pp. 44-45
- (10) *Ibid.*, p. 48
- (11) Gary Snyder, *op. cit.*, p. 85
- (12) *Sojourners* (Sojourners, Feb., 1980) p. 15
- (13) Gary Snyder, *op. cit.*, p. 94
- (14) ゲーリー・スナイダー, *op. cit.*, p. 115
- (15) This poem was recently sent to me by the poet.
- (16) Ezra Pound, *The Cantos of Ezra Pound* (Faber and Faber), pp. 239-240
- (17) 「エズラ・パウンド詩集」(新倉俊一訳, 角川書店, 1976年) p. 184
- (18) Ezra Pound, *Collected Shorter Poems* (Faber and Faber) p. 206
- (19) 新倉訳, *op. cit.*, p. 47
- (20) *Modern Religious Poems* (edited by Jacob Trapp, Harper and Row, 1964) pp. 111-112
- (21) cf. Robert Bly, *The Light Around the Body* (Harper and Row, 1967) p. 17

現代アメリカ詩の一面

- ②② cf. *53 American Poets of Today* (edited by Ruth Witt-Diamant and Rikutaro Fukuda, Kenkyusha, 昭和43年) p. 1
- ②③ cf. Robert Bly, *op. cit.*
- ②④ cf. *53 American Poets of Today*, p. 3
- ②⑤ Carl Sandburg, *Complete Poems* (Harcourt, Brace & World, 1950) p. 3
- ②⑥ 「シカゴ詩集」(安藤一郎訳, 岩波, 昭和32年) p. 15
- ②⑦ *The New American Poetry, 1945—1960* (edited by Donald Allen, Grove Press, 1960) pp. 360-361
- ②⑧ Mark Strand, *Reasons For Moving* (Atheneum, 1968) p. 31
- ②⑨ cf. "Howl", *The Penguin Book of American Verse* (1977), p. 520
- ③⑩ Anne Sexton, *To Bedlam And Part Way Back* (Houghton Mifflin, 1960)
- ③⑪ cf. *The Hudson Review* (Sept., 1965) p. 561
- ③⑫ *Modern American Poetry* (edited by Brother Thomas Corbett, The MacMillan Company, 1961) pp. 70—71

The One Aspect of Contemporary American Poetry

Yorifumi YAGUCHI

This paper tries to explain the themes of industrialization, urbanization and commercialization as they appear in contemporary American poetry, especially in poems of Gary Snyder, William Stafford, Mark Strand, Anne Sexton, Robinson Jeffers, Ezra Pound, Lawrence Ferlinghetti and others.